12　バルベルデ人体構造解剖図説再考

西大條　文一

バルベルデ（ファン・ヴァルヴェルデ・デ・アムスコ）の名は、その『人体構造解剖図説（以下『図説』と略）』の扉絵が小野田直武らによって『解体新書』に模刻されたといわれていることから、本邦では「ワルエルダ」として周知ではあるが、その生涯については不詳な点が多く、最大の業績である当の解剖書についても評価が定まっているとはいいがたい。ここでは当書のもつ独創性、特異性に焦点をあてて考察してみたい。

従来バルベルデの主著である『図説』は、十六―十七世紀をつうじてのベストセラーでありつづけたにもかかわらず、アンドレアス・ヴェザリウスの先行書『人体解剖学（以下『ファブリカ』と略）』の拙劣な剽窃であるとして不当にその価値が貶められていたように思われる。ヴェザリウス自身も「バルベルデは解剖に指一本触れたこともなく、医学のイの字も知らぬくせに、恥ずべき利益のためにのみ我々の芸術のスペイン語訳を企てたのだ」等とくちをきわめて罵っているが、同処に「彼の師のコロンボが表面的にさえなしえなかったガレヌスの記述を多くの点で覆している」とも記しており、当時は図版などのモチーフの流用やパロディは一般に許容されていたことや、現に同時期のアンブロワズ・パレの模刻に関してはヴェザリウスが隻句も発していないことなどからみて、彼のアンビヴァレントな発言は「コピー」が「オリジナル」をある面で凌駕してしまったことに対するやり場のないいらだちの表れでしかないように思える。

バルベルデ『図説』の独創性の第一は、判型が縮小され、また七巻の大著『ファブリカ』が一巻に纏められたことにより携帯が容易になった点で、袖珍の解剖実用書として広く普及した主な原因と考えられる。筆者蔵のイタリア語版（一五六〇年）にも人脂によるとおぼしき頁のめくり跡が散見せられ、この二書はあたかも近代におけるゾボッタ

解剖学書とクレメンテのアトラスの関係に比せられよう。

第二に、一五五六年の初版からスペイン語を採り、次いでイタリア語版、ラテン語版が一五六八年に至って反訳され、一五六八年にはオランダ語版がでているという点であり、あくまでラテン語中心のアカデミズムの（汎ヨーロッパ主義でもあるのだが）に先駆すること甚だしい。

第三に、各論解説を別章に立て、ヴェザリウスの『ファブリカ』では何頁にもまたがっていた図版を右側一葉に一括して印刷し、左頁に各部位の呼称と短い解説を付し、さらに記号の欄をもうけて対照索引を簡便にしたことである。これに伴い一頁内の部分図の配置も簡素でかつむだのない独特の様式を持つに至った。この画期的な方法はアンシクロペディストの時代をへてなお現代のフェナイス解剖学辞典にまで踏襲されている。

第四に、図の芸術性の優劣がよく云々されてきたが、ガスパール・ベチェッラによる『図説』の銅版画は、シェーマとしての明晰さと描線の克明さを増し『ファブリカ』のそれに劣っているとはいえない。むしろ描写の一般化（普遍化）という点において特定の遺体のクロッキーといった衒学的趣きを排したところに進化が認められる。それは背景の自然が必要最小限にまで割愛されていることによっても容易に知られよう。

第五に、基本にはガレヌスを奉じていたヴェザリウスをおそらく最も苦らせたと思われるのは『図説』の種々の新しい知見とその記載である。彼がそのその存在は聞き知っているが、いかにしても確認できなかった手掌短筋、腹直筋の起始停止、アブミ骨の存在等に関してはバルベルデの方が一歩先んじている。

ヴェザリウスの慎重さとバルベルデの進取の葛藤は、いわゆる「パラダイム」の転換期ならではといえようが、『図説』がミシェル・フーコーいうところの「まなざし」に通ずる「博物学的視座」を「遠近法美術」から解放した功績は大きく、当書の普及なくして後年のヴェザリウスの「再評価」もありえず、また、極東にエピゴーネン（のエピゴーネン）を生むこともなかったと考えられ、模倣が模倣を超越した稀有な例と思われる。

（順天堂大学医学部医史学研究室）